KUNICO

Kunitachi Gourmet and Culture Magazine

09

Free

欲しがりに
ビッタリ
な街。

2017 Summer

the best town for the greedy people

H:SC

桜で繋ぐ地域の輪 優しさと行動力の男

大谷和彦（おおたにかずひこ）

国立の名物と言えば、桜を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。国立市民の間でその話題になると、しばしば名前が挙げられる男性が「くにたち桜守（さくらもり）」の大谷さんである。大谷さんはボランティアで大学通り緑地帯の植物の世話を長年続けている。実は桜の木は、害虫が付きやすい、根元が腐りやすいなど弱点が多く、手入れをされないと長く生き続けることはできない。肥料をあげたり、薬を塗ったり、枝を切ったり、・・・約二百本にもなる大学通りの桜の木々を手入れし続けるのは容易ではない。その出発点は何だったのだろう。

傷ついた桜の木

「二十三年前にさくら通りを歩いていたら、桜の木の皮が大きく剥けていることに気が付いたんです。周りの木も見てみると、腐っていたり、皮が痛んだりしているものがたくさんありました。帰宅してから、そのことを市役所に問い合わせてみましたが、返答にはあまり安心出来ませんでした。当時は現在ほど環境問題への関心が高まっておらず、桜はほとんど放置された状態だったのです。このままではいけないと思い、くにたちさくらフェスティバルの実行委員会に電話しました。『それなら委員になってそのことを多くの人に伝えませんか』と言われ、参加を決めました。

参加して一年目、一九九五年の桜祭りでは、まず市民の方に桜に関心を持ってもらうため『国立桜物語第一章　桜を植えた男たち』と題したブースをつくりました。一九三四年に現天皇陛下の誕生を記念して桜が植えられたという経緯や、その当時桜を植えた人々のお話をまとめ、パネルで掲示しました。二年目には『国立桜物語』の第二章として、桜のポストカードを作ったり、桜の草木染をしたりする『桜尽くし』のコーナーを設置。三年目以降は桜の木に

肥料や薬が必要であることを発信して、カンパも行いました」

大谷さんにとって桜の手入れをすることは、風邪を引いた友達の看病をすることと同じで、当たり前のことなのだという。地道な活動を続けること六年、二〇〇〇年についに国立市も二年間の桜の保護計画を打ち立てた。同年、街の人の手を借りながら桜の世話を行うために、大谷さんはボランティア団体「くにたち桜守」を立ち上げた。参加者は年々増え、今では活動に関わる人数が年間三千名を超えるようになった。

桜を守り続けていくためには、子供たちにこそ桜のことを伝えなくてはならない、と考えた大谷さんは、桜守の活動を始めた当初から市内の小中学校で桜の課外授業も行っている。

「伝わる」伝え方

「今は小中高合せて十校で授業を行っています。その時に気を付けているのが、それぞれの学年に合った伝え方をすることです。『桜が傷ついているんですよ』と言っただけでは興味をもって聞いてもらうことは難しい。だから、例えば相手が一年生の場合、最初に『皆んなの好きな食べ物は?』と聞くんです。ハンバーグやアイスクリーム、という答えが返ってきた後、『それではミミズさんが好きな食べ物はなんだと思う?』と聞くと、ほとんどの子は答えが分からない。そこで、『ミミズは土が大好物なんだよ』と伝えます。これは、ミミズが土を柔らかくする役割を果たし、そのおかげで桜の根っこが水を吸収しやすくなっている、ということを教えるためです。授業の前はミミズを怖いと感じる子もいます。ですが、ミミズが私たち人間と同じ、食べたり眠ったりする生き物であることが分かると抵抗も減るようです。始めはミミズを触れなかった子が楽しそうにミミズを観察するようになると私も嬉しいです。そして、この話の後に『だから桜の根っこは踏んじゃいけないんだよ』伝えると、皆んな必ずそれを守ってくれます。

高学年の子供たちには、『桜の木の健康診断をしよう』と言って外へ出かけます。最初はみんな半信半疑ですが、興味は持ってくれるんです。健康な桜の木と、中が空洞な桜の木を叩き比べて、幹の密度によって音の違いが生まれることを教えると子供たちも納得してくれます。桜にも『声』があるということを五感で感じてもらうことが重要なのです。インターネットを使えばいくらでも知識が手に入る時代ですが、やはり最も記憶に残るのは実際に経験したこと、感じたことだと思います」

気さくな性格で、老若男女に好かれている大谷さん。国立では声を掛けられることがとにかく多いと言う。

「すれ違った子供が『大谷さんおはよう』と言ってくれたり、一橋の学生食堂でご飯を食べていたら院生の方が、『昔小学校でお世話になりました』と声を掛けてくれたり。記者の仕事に就いた子が『初めての記事で大谷さんのことを書かせて欲しい』と言ってくれたこともありました。ボランティア活動をしていると、緑地帯の管理に関して行政と交渉をする必要があり、上手くいかずにへこんだ気持ちになることも多いです。でも、皆さんの温かい言葉のおかげでなんとか乗り切っています」

ボランティアのその先に

「ボランティアをしていて一番大事だと思うのは、目的を持つことと、社会に役立つことをすることです。ただ単に自己満足のために行ったり、好きなことをしたりするだけでは意味がないと思います。僕は、桜や花壇の手入れをするが好きです。でも、それは子供たちや地域の人とつながるという目標があるからこそ行っているのです。人と人とのつながりがあれば『お金』とは違う幸せが手に入るはずです。活動を通じて地域のコミュニティが広がって、色んなところであいさつが聞こえるような街になって欲しいです」

国立の桜は、大谷さんと街の人々の「本気の桜」。来年も、再来年も、見逃すまい。

▲国立駅前たましんのショーウィンドウ　展示物を制作しているのは大谷さんがリーダーを務める「トトロ実行委員会」。身近な自然を大切にしようと、メンバーのママさんたちや子供達と共に活動中。

▶大学通り歩道橋から見た桜くにたちさくらフェスティバルは例年4月の第1土曜日、日曜日に桜通り沿いの谷保第三公園で開催されている。2017年は2日間で約1万人が来場した。